

一九五〇年の殺人

海野十三

青空文庫

「旦那人殺しでがすよ」

「ナニ人殺しだつて？ 何処どこだツ、誰が殺されたのだツ、原稿の頁ページが無いのだ、早く云え」
 「そツそんなに急いでも駄目です。場所は向うの橋の下ですよ。手足がバラバラになって
 いまさあ、いわゆるバラバラ事件というやつでナ」

「被害者の人相に見覚えは無いかネ」

「ああバラバラじゃ、人相は判りつこなしでさあ」

「じゃ直ぐに行つてみよう。さあ急げツ」

捜査課は総出で、現場へ急行した。なるほど橋の下に、惨ざんぎやく虐ぎやくの限りをつくして、バラバラの屍しかい体が散らばっている。

「殺されているのは、一体誰だろう？」

「それはレッド親分に極きまつていますよ」

「アレツ。人相は判らぬと先刻さつき云つたじゃないか」

「人相はモチ判りませんよ。しかしここに転がっている腕に『ケテー命』とあるからにや、
 レッド親分に間違いなしでサ」

「そんなの無いぞ、貴様！」と捜査課長は顔を膨らました。

「さあ、この屍体はガランの中に拾い集めて、本庁の手術室へ送って呉れ。……あとは犯人探しだ。さあ方向探知器を持ってこい。こうやって目盛を合わせて、鈕を押せばいい。ウム、出たぞ出たぞ。テレビジョンに犯人が現れた。なアんだ。これあ同じ渡世の競争相手のヤー口の奴じゃないか。オヤ真青になつて、四十番街を歩いているぞ。よおし、無線電話で交番を呼び出せ……ナニ出たつて。早く逮捕を依頼しろ。なんだつてもう捕えたというのかいヤー口の奴を。それじゃ一同、本庁へ引揚げだ。それ、呼子の笛を吹くんだ、呼子の笛を……」

ピリピリピリと鳴る笛の音に集つた部下を引連れ、捜査課長はニコリともしないで凱旋の途についた。

「課長！」と玄関の石段をのぼるが早いか、もうA組の主任警部が待つていた。

「犯人ヤー口が待ち疲れています。早くお調べが願いたいと云つて喧しくて仕方がありません」

「そうか、五月蠅い奴じゃ。紅茶を一杯い飲んでからのことだ」

紅茶に角砂糖を四つ抛りこんだのを、さも美味そうに飲み終つてから課長は調べ室の方

へトコトコ歩いていった。

「では調べを始めるとしよう。被害者の用意は、もういいナ」

「はい、出来ています。連れて参りましょうか」

「まだいいよ。加害者のヤーロが先だ。ここへ引立ててこい」

チェリーを一服喫ぶくすつているところへ、ヤーロ親分が留置場りゆうちじょうから連れられてきた。

「課長さん。早速さつそくですが自白じはくしますよ。レッドの奴をバラバラにしたなア、このあつし

でサ。刑罰はどの位ですか」

「そんなことは、まだ云えない。それよりもお前は何故レッドを殺害したのか」

「ナーニね。あいつの面つらがどうにも気に喰くわねえんでサ。むしゃくしゃとして、やつちや

いました。それだけのことです」

「よオし。では次に被害者を呼べ。レッドを呼ぶのだ」

ヤーロはそれを聞くと椅子から立ち上った。警官は畏かしこまって、隣室から被害者レッドを

連れてきた。

「やツ、ヤーロ奴め、ここにいたな」

「こらツ、静まれ、喧嘩をしちやいかん。ところでレッド、被害者として何か申立たいこ

とはないか」

「へえ、ありがとうござえやす。あつしを殺したこのヤー口の奴を、ウンと罰してやつておくんなさい。終り」

「それだけだナ。よし決まった。判決。ヤー口はレッドを殺害したる罪により、金五万円也の罰金に処す。但し二十日以内に納付すべし」

「えッ五万円を二十日間に……。そりやひどい。月賦げつぷにしておくんなさい。毎度のことじやありませんか」

「駄目だ、毎度のことじやから……。閉廷へいてい！」

捜査課長は、木の槌つちで卓たくの上をコツンと叩いた。加害者と被害者とは睨にらみ合つたまま、室へやを出ていった。

課長は手をのぼして、葉巻を一本口へ抛ほうりこんだ。そして思わず独ひとりごと白はした。

「外科が進歩するのも良よし悪あしだ。バラバラ屍体も二、三十分のうちに、元のピンピンした身体に縫いあげられる世の中では、殺人罪が流行はやりすぎてイカン」

そのとき扉が開いて、警官が顔の色を変えて入つて来た。

「課長、大変です。本庁の前で殺人です！」

「ホイ、また流行ったか」

「レットがヤー口をバラバラにしてみました。先刻と反対です。レットの身体を本庁で縫い合わせたとき、肩の肉が途中で落したものが無かったため、穴ぼこになっているのです。そうなったのもヤー口のせいだということで、ヤー口の肩の肉をナイフで切り、その序にバラバラにしてみましたのです」

「仕方がない。早く両人を集めてこい。こんどは罰金をすこし高くしよう」

それから二十一日経った。捜査課長はご機嫌甚だ斜めだ。さつき総監からイヤな言葉を投げつけられたのだ、「君のところには、取り立て未了の罰金がすこぶる多くて責任額にも達しないじゃないか。あまり成績が悪いと気の毒だが、退職して貰わにやならぬぞ」と威されたのである。

(よオし、こうなったらば已むを得ん。最後の手を用いて、総監の鼻を明してやろう……)
彼は机上のマイクロフォンを取りあげて、レットとヤー口の逮捕を電命した。

二人の親分が本庁に到着したのは五分の後だった。

「二人揃ったネ。揃ったら、そのまま此の手術室へ入れッ」

「なにをするんです、課長さん」

「罰金は二、三日うちに届けますよオ」

「黙って入らんか。わしの命令だツ！」

レッドとヤーロが手術室の中に姿を消してから、約一時間の後扉が明いて、一人の人間が出て来た。レッドのようでもあり、ヤーロのようでもあった。よく見ると縦半分たてはんぶんに切断した二人の身体を半分ずつ接つぎ合あわせてあった。右がレッドで、左がヤーロ。ちつとも足並あしなみが揃そろわず、二本の手は激あしく抓つかり合あっている。

「さあ、こつちへ来い」と課長は意地悪い笑えみを浮べて云った。

「当分この状態で暮してみろ。不便で参つたら、例の罰金を調ちようたつ達だつしてこい。そうすれば元々どおり、レッドはレッド、ヤーロはヤーロの身体にしてやる。金が払えないうちは駄目だぞオ」

「課長、ひでえや。もう一人のあつし達はどうなるんで……」

「あれは人質にとつといて今日から下水掃除をさせる。辛あけりや早く金を納おさめて引取りに来い」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行島」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

初出：「モダン日本」モダン日本社

1934（昭和9）年7月号

入力：tatsuki

校正：田中哲郎

2005年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一九五〇年の殺人

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>